

近代東アジアの書学と文人交流

—山本竟山（1863－1934）の事例を中心に—

本論文では、碑学書家である山本竟山とその周辺に注目し、近代東アジアの書学と文人交流の事例に焦点を絞って分析・検討した。一対一、一対多、多対多という文化交渉学の視点を用いて、これまでほとんど言及されることのなかった、竟山を焦点とする文人ネットワークの実態を明らかにした。また、竟山による書学の活動や書についての美意識、また、その位置付けについて検討を加えた。

序章では、本論文の問題意識、研究目的、時代背景、先行研究、研究方法、論文結構について記している。とりわけ、山本竟山が登場した時代背景と、近代日本における書の位置付けを中心に追求した。明治期における日中文化交流の実情、近代書道と美術また漢学の関係についての検討を踏まえて、竟山をめぐる東アジアの文人交流ネットワークを中心に、近代東アジアの書道文化交渉、及び竟山と碑学書法の位置付けを考察しようとした。これが研究目的で意図である。

第I部「竟山書学の源流」では、竟山書学の源流について、一番深く影響のあった日中両国の師匠である日下部鳴鶴と、楊守敬との師承関係を検討した。

第一章「日本人の師・日下部鳴鶴」では、鳴鶴と竟山の師弟関係および文人交流を、主として二人の書簡や作品から見てきた。師弟関係の成立は、楊守敬が来日した背景として、鳴鶴が「六朝書道」を主張した時期である。関東を拠点とする鳴鶴は、頻繁に旅に出たため、竟山と書簡での交流が多かった。取り上げた書簡により、鳴鶴は、竟山に度々代理購買を依頼し、それによって日中の文人ネットワークを結び、竟山の見聞と視野を一層広げた。書風の面では、鳴鶴は、六朝書とくに北碑の線質を混合し、北碑の雰囲気を強調しながら、初唐の結構で書かれる作品を多く残した。竟山は、直接北碑や拓本から臨模するチャンスを多く掴んだため、北碑の書風や書体を色濃く反映した。それにしても、楷書と隸書については、とくに隸意を帯びた素朴で力強い楷書体の形成において、鳴鶴が竟山に与えた影響は大きい。竟山は、鳴鶴とともに六朝書法を

伝播した。さらに、竟山は、鳴鶴の人格と書法を慕い、鳴鶴の追悼会と遺墨展を自力で主催し、師弟愛をうかがうことができる。

第二章「中国人の師・楊守敬」では、楊守敬の功績、竟山とのふれあい、竟山に与える影響という三節から、楊守敬と竟山の師弟関係を考察した。まず、楊守敬が来日後、中国で亡失した古籍善本の蒐集活動は、中国にとって、近代文献・書誌学研究史上における重要な企画であり、日本にとっては、近現代の書道変革において、圧倒的な意義を有している。楊守敬が携行した夥しい碑法帖及び書法論は、竟山などの書家たちの探究心を大いに刺激した。次に、楊守敬は、1902年に竟山と交流を始めて以来、中国での面会と筆談のほか、往復書簡を主要手段とした。楊守敬は、竟山と金石碑版や書作、拓本をめぐる評価と交流を通して、竟山の視野を一層広げ、とりわけ所蔵した『餘清齋帖』と『潘孺初臨坐位帖』と『潘孺初臨鄭文公碑』を竟山に譲った。一方、竟山は、購買依頼と楊の収蔵品の買取りなどで、経済的に困っている楊守敬を支えた。さらに、毛筆の選定や範書の贈与、人脈の紹介、追悼会・遺墨展という四つの方面を取り上げると、楊守敬は竟山に大きな影響を与えたことが明らかになった。両氏の師弟交流は、竟山の視野と視覚的な経験を大いに広げ、文人ネットワークを結ぶのみならず、二十世紀初期に、日中両国が書芸について直接交流する様子と事例をよりいっそう浮き彫りにするものと思われる。

第Ⅱ部「文人交流ネットワーク」では、ネットワークという基本的な視点を提示する上で、時代順に竟山と中国・朝鮮・日本の文人との交流を論じ、また和漢法書展覧会における文人の営みを考察した。

第三章「中国・朝鮮文人との交流」では、まず明治後期における竟山と朝鮮名士の安心田の交流を考察し、両氏が竟山の故郷岐阜で結んだ文人ネットワークを新資料によって明らかにした。続いて、竟山の七回の中国遊学中に、文墨界の巨匠である呉昌碩と実りに満ちた面会を3回行った事実について、資料に基づいて検証した。呉昌碩の紹介のもと、竟山は、金石碑版・書画を蒐集して持ち帰り、関西ないし日本書道の振興と日中文化交流に尽力した。呉昌碩書画の購入と普及などを通じ、激動の時代に呉昌碩を支えたキーパーソンとなった。さらに、往復書簡や筆談を通じて、竟山は京都に寓居した金石学大家の羅振玉との書学交流を明らかにした。竟山と安心田、呉昌碩、羅振玉などの書画家・金石学家とのネットワークは、文墨趣味を伝えただけでなく、近代、特に明治後期及び大正期の日中朝文化交流の一面を示している。

第四章「日本文人との交流」では、まず長尾雨山との交友について、竟山の上海滞在中、および雅会での営みを中心とする往来書簡や書画作品を通して、両氏の書、学問や教養、厚誼について考察した。竟山と雨山の活動は、近代日本の文人たちに刺激を与えつつ、伝統文化の底力を示す役割を果たしたのである。また、現存する竟山と宗星石の往来書簡と、『申報』の記事を通して、二人の交友関係を部分的に考察した。竟山と宗星石の交友関係を解明することは、台湾勤務時代において、竟山の書学をめぐる交流を理解する重要なものだけではなく、明治後期の文人書家のあり方を考える上でも一定の意義を有すると思われる。さらに、竟山と鉄斎及び謙蔵の交遊を物語る書簡や、書画作品を整理・解説し、協賛した雅会も視野に入れて考察を加えた。竟山と鉄斎父子の交遊は、大正期京都の文人交流の貴重な一側面を示すものである。竟山と長尾雨山、宗星石、富岡鉄斎・謙蔵父子との文人交流は、明治後期と大正期における代表的な日本の文人たちが、いかなる態度で書や学問と向き合ったかを示しており、雅会での営みと書芸を盛り上げることに尽力した様子を浮き彫りにした。

第五章「山本竟山と和漢法書展覧会」では、大正二（1913）年十二月四日に京都で、山本竟山が主催した和漢法書展覧会を研究し、初公開の資料を手がかりに、この展覧会をめぐる文人ネットワークに注目し、文化交渉学の観点から、その内容を明らかにした。竟山によって出版された展覧会の記念品『和漢法書展覧会記念帖』を取り上げて展示品に着目し、主催の経緯と経過を解明した。また、比田井天来、羅振玉、王国維、長尾雨山、磯野惟秋、犬養毅諸氏の往復書簡に基づき、文人ネットワークを考察した。和漢法書展覧会は、蘭亭会と共に日本書道界に刺激を与え、日中交流ないし東アジア文化交流において重要な影響を与えたのである。

第Ⅲ部「竟山とその書学の位置付け」では、竟山の経歴と代表作に基づいて、碑学と帖学の成立と融合の実態、及び竟山とその書学の影響力を考察した。

第六章「碑学と帖学の成立と融合」では、碑学と帖学の受容、書から見る美意識、著書『竟山学古』という三つの方面から、竟山書学における碑学と帖学の成立と融合を検討した。竟山は、日下部鳴鶴と楊守敬に師事する前に、神谷簡齋と王鶴笙に師事したほか、貫名菘翁に私淑し、早期の学書において日中両国の書法、特に帖学を身につけたと思われるが、竟山の早期の書作が一点も現存しておらず、帖学派の書作や書風の移り変わりを確認できない。のちに竟山は、中国へ七回赴き、蒐集・実技・研究にわたる広い範囲で夥しい収穫を得たのである。また、竟山の各書風の代表作を取り上げながら、「骨」と「筋」、

「力」と「気」という視点で、受容された碑学の表現を考察した。さらに、『竟山学古』を精査し、「碑帖融合」という営みを再確認した。

第七章「竟山とその書学の影響力」では、竟山の収蔵品、書道会への尽力、碑石揮毫と代書活動、書道教育と出版業績という四つの方面から、竟山とその書学の影響を考察した。竟山は、日中両国での夥しい蒐集を通して、大正期の京都蘭亭会・和漢法書展覧会・赤壁会・寿蘇会・清朝書画会において積極的に蒐集品の展示に協力した。また、自己の鑑識眼と書法を鍛え、政治家・書画家・文学者との交流のネットワークによって人脈を築いた。加えて、日中の有名な書家に師事し、日本国内でかなりの人望を獲得し、書道界へ大きな影響を与えた。竟山は、大正・昭和にかけて書道会を発足させ、複数の書道会の顧問や審査員（長）を担当したが、そのことは、書道界での活躍ぶりを明白に示すものである。また、竟山の書道界での位置付けと、近代の主要書道団体の成立、展開及びその変遷の一側面をうかがうことができよう。明治後期から昭和前期にわたり、植民地台湾と日本、特に京都において、揮毫や代書を依頼されたことから、竟山とその碑学書法が、とりわけ当時の関西で支持・信頼され、書風も広く受け入れられていると言ってよい。さらに竟山は、熱心に書道教育と出版事業に携わっており、質も量も抜群で、書芸の真髓と妙所を伝えていた。収蔵、審査、揮毫、教育、出版などの面における竟山の多岐にわたる働きは、大正・昭和期において、人々に尊敬され、関西書道界の巨人として異彩を放っていた。

結論は、これらの研究内容をまとめ、全体の結びとする。また、本論で検討した近代東アジアの書学の時代性と文人交流ネットワークなどの問題点を再確認する。扱うテーマの行方を踏まえ、今後の課題を提起する。さらに、山本竟山の書学年譜、近代の書社・書展・書道関係出版物、学校における書道教育、書家たちの書学交流活動に関して、代表的な記載に絞り、六つの附表を載せている。